

ヒマラヤ

No.386



2004 JAN



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

2004年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2004年7月22日～8月27日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

2003年10月12日、ヒムルン・ヒマールで雪崩のため遭難死亡した野沢井歩の家族と共にマウンテンフライトすると強風の中にガネッシュ・ヒマールの全山が美しく聳え立っていた。左からⅡ峰(旧Ⅲ峰)、Ⅳ峰(パビール)、奥に主峰(ヤンラ・カンリ)、Ⅲ峰(旧Ⅱ峰ラプサン・カルポ)、右端がⅤ峰である。

(文・写真：岩崎洋)

ヒマラヤ No. 386

- | | |
|------------------------------|---------|
| 1. 第1回『新日本ヒマラヤ会議・東京』を成功させよう! | |
| 2. 東南チベット・イラワジ川源流から雲南へ | 中村 保 |
| 5. バルトロ氷河のトレッキングとゴンドコロ峠越え | 南井英弘 |
| 11. パキスタン登山情報 | 日・パトラベル |
| 15. ロー・マンタンの空、遥かなり(17) | 高橋 照 |
| 20. 高橋(旧姓 山田)敏雄君のこと | 志小田美弘 |
| 21. ヒマラヤニュース〈トピックス・ヒマラヤから〉 | |
| 22. [連載] 日本ヒマラヤニスト名鑑(4) | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

第1回『新日本ヒマラヤ会議・東京』を成功させよう！

日本ヒマラヤ協会では、これまで毎年1月に「インド・ヒマラヤ会議」、2月に「中国登山研究会」、4月に「高所登山 事故と環境対策研修会」を開催し、ヒマラヤ登山を目指す愛好者への情報伝達と啓蒙活動を実施して参りました。

しかしながら、昨今のヒマラヤ登山愛好者の質的变化のためか、三つの会議への参加者は年々減少する傾向にあります。

本会ではそのような傾向について協議した結果、これまでの会議を発展的に解消し、従来のものを統合した内容の会議を「新日本ヒマラヤ会議」として発足させることと致しました。

その第1回会議を東京にて下記要領により開催致しますので、何卒ご参加戴きますようご案内申し上げます。どなたでも自由に参加できます。

尚、今回のインド・ヒマラヤの時間は、日本山岳会の招請により来日いたします、インド海軍のサティア・ダム氏をお迎え致します。

記

1. 主 催：日本ヒマラヤ協会（H A J）

2. 日 時：2004年 1月25日（日） 9時～17時

3. 場 所：『労働スクエア東京（旧・東京都勤労福祉会館）』

〒104-0041 東京都中央区新富1-13-14 TEL 03-3552-9131

『交通のご案内』〔地下鉄〕日比谷線八丁堀駅、銀座線京橋駅、有楽町線新富町駅、都営・浅草線室町駅、〔JR〕京葉線八丁堀駅、

4. 会費と申し込み先：

〔一 般〕郵便局にある「郵便振替用紙」に住所・氏名・性別・電話番号を記入し3千円を納入下さい。

〔口座番号 00100-6-48954、加入者名 日本ヒマラヤ協会〕

〔高校生〕無料です。住所・氏名・性別・学校名・学年を電話・FAX・ハガキにて、下記あてご連絡下さい。参加高校生にはH A J特製テレフォンカードのプレゼントがあります〕

5. 問い合わせ先：〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会 TEL 03-3988-8474

FAX 03-3988-8502

6. 定員と締切り：130名 定員になり次第締め切ります。

7. 日 程：〔講師の都合により一部内容が変更される場合があります〕

9：00 受付開始

9：10 開会挨拶

9：15 「中国ヒマラヤ未知の山々を探る」 山森欣一（H A J理事長）

10：00 「仮題・インド・ヒマラヤの魅力」 サティア・ダム（インド海軍）

12：00 昼食（各自でお願い致します）

13：00 「ネパール登山の変遷と現状」 尾形好雄（H A J常務理事）

14：00 「カラコルム、パスー峰登頂と事故の記録」 酒井國光（H A J登山隊長）

15：10 「事故対策・クレバス転落事故例の研究」 中川裕（H A J常務理事）

16：00 「環境対策・テイクイン、テイクアウトの実践方法」 山森欣一（H A J理事長）

16：45 閉会挨拶

17：00 解散

東南チベット・イラワジ川源流から雲南へ

ーアジアの五つの大河を横断する探検史紀行、2003年10月ー

中村 保

4年越しの計画を横断山脈研究会の永井剛さんと実行することができた。今回は雲南・徳欽のチベット族ガイド、陳さんに旅の手配、同行をお願いした。インド、ミャンマー北部に近い東南チベットの察隅から入る横断ルートは東チベットの中では最も入域の難しい未開放地区であるが、西藏軍区の許可がとれ長年の夢が実現した。この地域を踏破した外国人は1911年のベイリー以降、独龍江（イラワジ川源流）下降を狙った1993年のアメリカ人冒険野郎とカメラマン（フランス人）・通訳だけである。無許可で入った彼等は日東の解放軍駐屯所で捕まり10日間の拘束のあと追放されている。以下、旅の目的とハイライト、日程、ルート図、写真の纏めを紹介する。いずれ詳しい紀行を書くつもりである。

目的とハイライト

1. イラワジ川（中国名：独龍江）源流の探査と源頭の山の確認
2. 1911年のキャプテン・ベイリーの足跡の検証と今日の比較
3. 横断山脈の核心部「深い侵食の国」ー五つの大河の完全横断
4. 陸の孤島、日東とツァワロン・メンコンの今日の姿を取材ー（百歳の老人とインタビュー）
5. 60年ぶりに賑わう羊・水年の梅里雪山の巡礼と共に旅をする。
6. バショイラ嶺の秘峰「木孔（ムコン）雪山山塊 6,005mを探る

以上の成果を上げることができた。この他に、ミャンマー最北部との国境にアクセスする計画も立てたが、解放軍の駐屯所が展開し中国人でも許可が必要であり、外国人は厳禁と言われたので断念した。

日 程

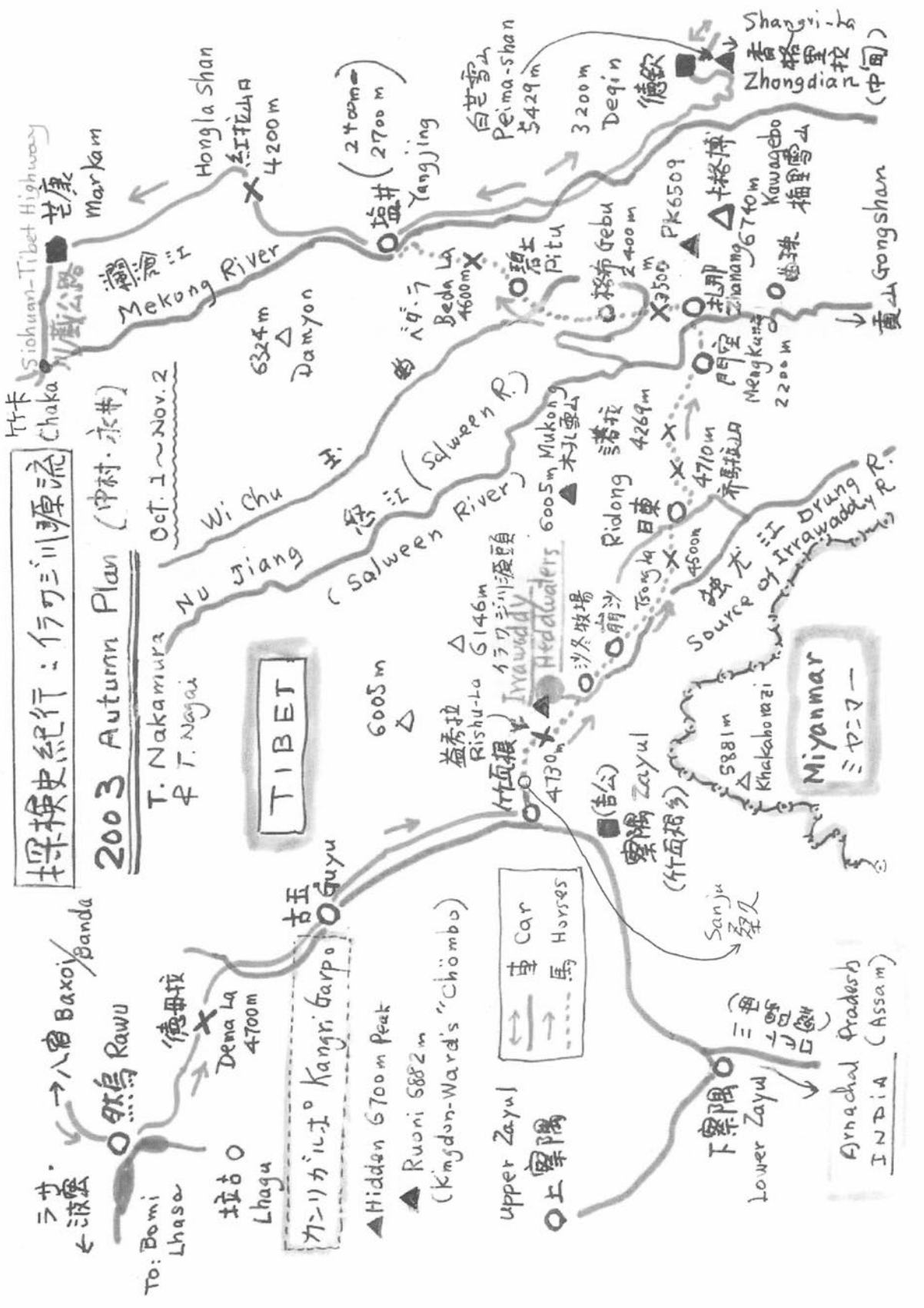
- 10月1日：東京ー上海（空）
2日：上海ー昆明1,890m（空）
3日：曇・小雨、昆明ーシャングリラ（空）
3,220mー徳欽3,230m（車）
4日：小雨、徳欽にて準備
5日：曇、徳欽ー塩井温泉2,390m（車）
6日：曇、塩井温泉ー左貢3,720m（車）
7日：快晴、左貢ー八宿3,300m

- 8日：晴後曇、八宿ー然烏3,900mー察隅県竹瓦根ー桑久（車）
9日：桑久にて馬のキャラバン手配、小学校に泊まる
（10月10日ー26日、17日間の馬のキャラバン）
10日：雨、桑久3,090m（サンジュウ）ー明期（ミンチ）放牧小屋3,635m、馬11頭・馬方3人 桑久ー日東
11日：曇後晴、明期ー益秀拉手前の放牧小屋（チョンチュン）4,170m
12日：快晴、放牧小屋ー益秀拉4,730mーイラワジ川源頭ーキャンプ4,060m
13日：快晴、キャンプーイラワジ川源流沿いー江空（ジャンコン）キャンプ3,990m
14日：晴、キャンプー昌拉4,460mー（ザルン）キャンプ4,020m
15日：晴、キャンプー白安（ベアン）放牧小屋3,780m
16日：晴、白安放牧小屋ー日東（リドン）3,560m・チベット族の家、馬を替える
17日：快晴、日東ー斎馬拉（ツァマ・ラ）4,710mーキャンプ4,020m
馬10頭・馬方2人 日東ー門空（メンコン）
18日：晴後曇、キャンプ諾拉（ノ・ラ）4,269mーキャンプ3,120m
19日：曇後晴、キャンプーメンコン2,200m・チベット族の家
20日：晴、メンコンにて取材、百歳老人とイ

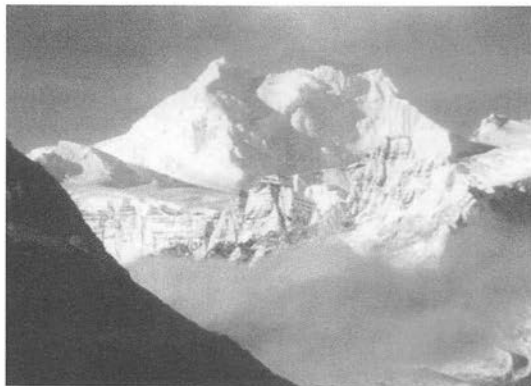
探検史紀行：イラワディ源流

2003 Autumn Plan (中村・永井)

Oct. 1 ~ Nov. 2
T. Nakamura
& T. Nagai



▼ルオニ（6,882m）主峰



ンタビュー、馬を替える

21日：晴、メンコンーザナン2,100mー龍普
2,560m・チベット族の家

ラバ7頭・馬方2人 門空（メンコン）
ー塩井

22日：晴後曇、龍普ートンディ・ラ3,410mー
格布2,460m・チベット族の家

23日：曇、格布ー瓦浦（ウオボ）2,730mラ
ドウン2,880m・チベット族の家

24日：晴後曇、ラドウンートン・ラ3,270m
碧土（ピトゥー）3,170m・キャンプ

25日：曇後雪、碧土ーベダ・ラ4,540mーツォ
ンチュウ2,880m・チベット族の家

26日：曇・小雨、ツォンチュウーラゴン根巴
3,480mー甲達（ジャダ）2,440mー塩井
2,700m、塩井で馬のキャラバン完了、
後は車で塩井温泉へ

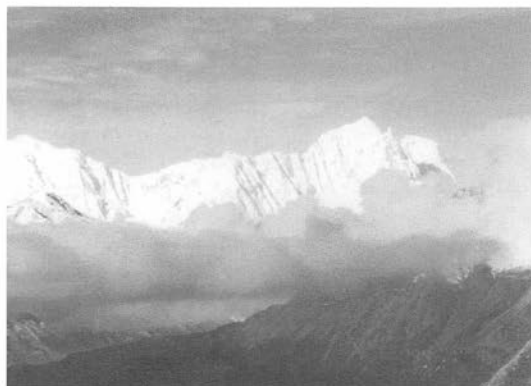
27日：曇、塩井温泉ー徳欽（車）

28日：曇、徳欽ーシャングリラ（車）ー昆明
（空）



▲ロヒト、イラワジ分水嶺、益秀拉（4,730m）

▼ルオニの北東にある6,700m峰



▼バショイラ嶺の木孔雪山（6,005m）



▲ツォン・ラ（4,460m）の南と昌水湖



▲イラワジ源頭、楽竜雪山（5,500m）

バルトロ氷河のトレッキングとゴンドコロ峠越え

2003年7月18日～8月15日

南井英弘

コンコルディア目指して

7月19日(土)11時、パキスタン政府、登山局の新事務所で隊長一人ブリーフィングを受ける。ニッパトラベルから事前に申請書を提出してあり、以前から顔見知りの部長さん。提出ドキュメントのページを繰りながら、彼自身が十数か所にサインして終了。政府機関は土曜日の午後と日曜日は休みであり、ブリーフィングが終ったので明日に出発できる。本来6,000m以下の山やトレッキングではブリーフィングは不要だが、バルトロはインドとの紛争地域に含まれているためブリーフィングがある。

7月20日、朝6時発ーチラス19時45分着
コースター1台に隊員8人、ガイドなどニッパのスタッフ3人、計11人とザックやクッキング道具を山積みしてイスラマバードを出発。インダス河沿いのベシヤムで昼食後、宿泊地のチラスに到着。チラス到着の少し前に、夕日に輝く八千m峰ナンガ・パルバットを眺めることが出来た。チラスでは例年通り、夜中も気温がほとんど下がらず、40℃前後の暑さの中、空調なしで一夜を過ごす。春からナンガ・パルバット近くで頻発している大地震と局地的な大雨でこの一ヶ月間カラコルムハイウェイは度々通過不可能な状況にあったが、何とか走り抜けることが出来た。落石、土石流の跡が生々しい。

7月21日、5時半発ースカルド(2,300m)着午後3時

ジャグロットあたりからの朝日に輝くナンガ・パルバットを写真に撮り、インダス河沿いの青天井のレストランで昼食、悪路をドライブしてスカルド着。2日間で735kmを走行している。

7月22日、高度順応のため、デオサイ高原(標高4,000m)にジープ2台で出かけた。途中3,000mと3,500m強のところそれぞれ30分ほど滞在

し、高山植物の色とりどりの花が咲き乱れる高原で2時間半ばかり、写真を撮ったり、散歩をしたりして高度順応に努めた。

7月23日、6時発ートンガル着午後1時
隊員は2台のジープ、荷物とニッパのスタッフ8人は別の2台のジープでトンガルまで入る。トンガル手前で橋が崩れており、お互いにジープを乗り換えた。アスコーレまでジープで入る予定がトンガルとアスコーレ間の道が数箇所崩壊しており、トンガルまでしか入れなかった。

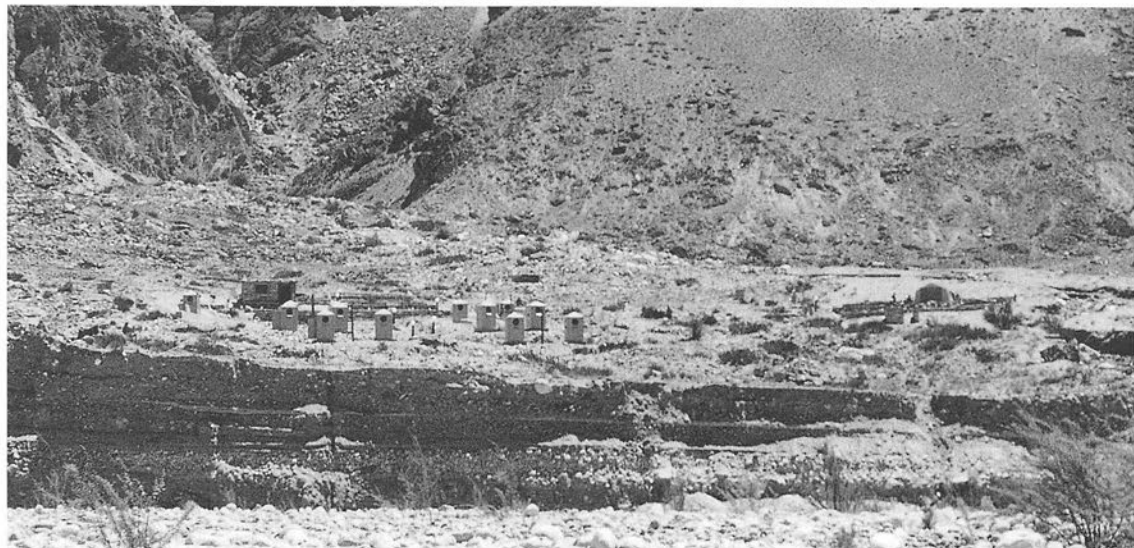
5年前、スコロからの帰路、ジープ待ちで1泊したトンガルは沢山のポーター達と人糞の山で、悪臭に悩まされた基地だったが、今回、テントサイトは整地され、便所棟が設置されるなど清潔で木陰のある景観の素晴らしい場所に変身していた。

7月24日、7時発ーコラホン(3,000m)着14時
トレッキング初日、70人のポーター、8人のニッパスタッフと共にトレッキングを開始。2時間でアスコーレ着、警察を訪問。各自が先方のノートに署名、登山届を提出した。想像どおり炎天下、強烈に暑い中の歩き始めとなった。5年前に登山をした思い出のスコロピークは残念ながらガスの中で見えなかった。キャンプ地到着1時間ほど前から突然の雷鳴と共にものすごい通り雨が歓迎してくれた。この雨で気温も少し下がり、カラコルムの猛烈な暑さのため意識朦朧として歩いていた2人の隊員も救われた。この後7月27日夜、28日朝そして8月2日夜に小雨が降った程度で8月4日の吹雪までほとんど快晴が続いた。

7月25日、7時30分発ージョラ(3,120m)着12時半

総勢86人が一斉に出発する光景は壮観なり。ビアフォ氷河の末端を横切り、パンマー氷河から流れ出たデュモルド河の濁流に架かるつり橋を一人一人渡ってジョラのキャンプ場入り。このつり橋

▼デュモルド河対岸のジョラキャンプ場遠景。左側に見えるのがトイレ棟群と電灯



は現地人が架設し、一般に開放している。渡橋料は外国人が20ルピー（40円）、ポーターは15ルピー。水量が多く、激流の渡渉は全く不可能であり、この橋がなければパンマー氷河まで遡行して左岸に渡るしかない。丸1日以上時間を要するので有難いものだ。毎日テントサイトから見てきたバコール・ダッソが姿を変えて目前に迫り、その奥にマンゴクソールが大きく見える。

パキスタンの篤志家(ムシャラフ大統領の某腹心の夫人)の支援で、ジョラのキャンプ場は驚くほどに整備されている。清水がサージタンクにひかれ、そこから各所にパイプで給水している。洋式、現地式のトイレ棟が10戸、洗面台が5台、シャワールームが2棟、手洗い用の水道栓が数箇所設置され、太陽光発電を利用してサイトでは夕方から23時まで10本の明るい電灯が点灯されていた。また、サイト内に細いパイプを敷き詰め、沢山の柳やポプラの苗木が植林されている。

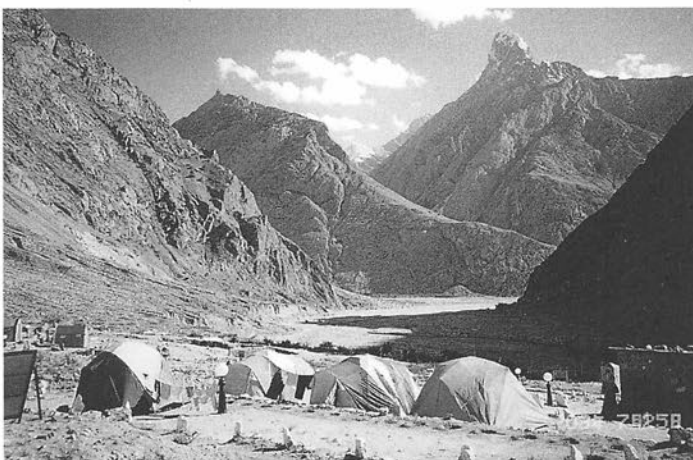
7月26日、7時発ーバルデマル(3,165m)着12時

デュモルド河を少し下り、再びバルトロの本流(ピアフォ谷、ブラルド河)に沿って遡行。テント場はちょろちょろと濁り水が流れる荒涼とした山裾だ。テント場の上にはチョリチョが覆い被さるようにせまり、東にパユーの岩峰が大きく

見えている。

7月27日、6時45分発ーパユー(3,285m)着12時
左の氷河から流れ込む濁流を渡渉。流れに足をとられて右足が膝近くまで激流に浸り、プラスチック・ブーツの中は冷たい水でびしょ濡れになった。途中から、やっとバルトロ氷河の舌端部が見えてくる。本来見えるはずのK2は薄い霞のために見えず。

パユーのキャンプ場にはジョラと同様に立派な設備が出来ている。ゴミや悪臭は全く無い。白ポプラの大木や柳などの木立ちの中を、ツーリストサイトとポーターサイトに2分し、トイレ棟、洗面所、洗濯場などが完備され、清水がサージタンクを経て、それぞれに給水されている。



▲ジョラキャンプ場。左端にソーラパネル。テントと電灯

毎日、新しい宿泊地に到着後、高度順応のために高みを目指して登っているが、今日は急傾斜の裏山に100m程登った。連れてきた3頭の山羊を、ポーターを含めて全員で御馳走になった。いつもながら新鮮なレバーの油いためは殊のほか美味しい。

7月28日、パユーにて終日休憩

起床時、四條は両脇が大きくかぶさり目玉が見えないほど、顔全体がパンパンに腫れていた（ダイアモックスの服用と大量の水分摂取で翌朝には復調していた。）

サイトからの展望；グレート・トランゴ、カテドラル、ロブサン・スパイヤー、ムスターグ・タワーの一部など。

パキスタンTVのドキュメンタリー「バルトロ氷河」の取材を受ける。また、ハイポーターのグラムは田邊氏の発案で対岸にあるパキスタン軍の軍馬の基地に出かけ、軍馬のチャーターについてネゴ。明日、2頭だけウルドカスまで5,000ルピー（10,000円、足元を見てかなりボラれている気がする）でOKとなる。

昨日、若いオランダ人男女の2人、本日、南アフリカ、フランスの2人がテントサイトに入り、その後10数日間ゴンドコロ峠を越えてフーシェま

で同じ行程となった。

7月29日、7時15分発ーホブツェ（3,700m）着16時過ぎ（9時間弱）

1時間ほど歩いて、やっとバルトロ氷河上に出る。途中からバルトロならではの景観が続出、トランゴタワー、ユリピアホー、グレート・トランゴ、ネームレスタワー、カテドラルそしてブロード・ピーク（8,051m）も。ホブツェのテントサイトは増水で水没しており、なんとか水溜りを避けて路上に設営した。

鈴木、田邊はチャーターした馬（驢馬か）でホブツェ経由ウルドカスに入る。3度下馬しただけで、8時間を要したと。

7月30日、7時発ーウルドカス（3,930m）着11時

飯田氏が出発時から遅れ気味、熱（*帰国後医師の診断結果は細菌性鼻炎だと）があるようだ。道中はムスターグ・タワー、ロブサン・スパイヤー、ピアンゲ、ウルドカスピーク、ガッシャーブルム山群のG 4（7,929m）とG 2（8,035m）、クリスタルピーク、マーブルピークなど針峰が一步毎に姿を変える。ウルドカス到着後、高度順応のために100mほど裏山に登る。バルトロ氷河が俯瞰でき、一日の労苦も報われる。ブロード・ピークが輝き、これらのピークから流れる氷河にそれぞれの表情



▲パユーキャンプ場のトイレ棟群と左端が洗面場。

有り。

本日はシーア派イスラーム教徒にとって、聖なるアシュラの日である。夕方、我々のガイドを含め現地人スタッフ全員78人と他隊のポーターなど百人近くがキャンプ地の一角に集まり、シーア派第三代目イマームであるフサインの殉教を追悼している。ある者は自分の体を力一杯たたき、殆どの者は涙を流して、一斉に悲しい声でコーランの一節を詠み、唯一神アッラーを称えている。今から1300年前にフサインの受けた痛みを追体験し、涙を流して悲しみに耐える姿は長年イスラーム教徒たちと接しているが、どうしても私には理解できない。

7月31日、7時出発ーゴロ2(4,165m)着16時、朝の気温；3℃

昨日から不調を訴えていた飯田氏は解熱剤が効いているが、ここで滞在し、体調が戻ると馬で追いかけることにした。目前にG4、G2を眺め、ブロード・ピークそれにマッシャーブルムが加わり、素晴らしい景観の中の終日だ。

8月1日、7時出発ーコンコルディア(4,450m)着15時、朝の気温；0℃

コンコルディアに近づいてやっとK2(8,611m)が均整の取れた、魅力的な姿を見せた。またバルトロ・カンリの真っ白な山容も格別だ。テントの中に寝転んで、K2、ブロード・ピーク、ガッシャーブルム四峰、ゴドイン・オースティン氷河を眺めている。まさに至福のひと時だ。体調不調の飯田氏はウルドカスから馬でバユーに向かうとパキスタン軍の電話で連絡有り。

8月2日、休養日、コンコルディア周辺で散策、登山者冥利に尽きる時を過ごす。

コンコルディアを中心に半径15km内に6,500m以上の針峰、巨峰が41座、8,000m峰も4座あり。朝から晩まで、それらの名峰群に囲まれての一日だった。

G4の基部方面に散歩に出かけた。トレースの無い氷河上の散策は大小クレバスあり、氷河上の融水の急流有り、氷壁有りと危険極まりないことを再認識させられた。チョゴリザ全容を見たかったが前山が邪魔になり、頂上稜線しか見ることが出来なかった。夕方にはポーター達が歌い、踊り

始める。彼らに引き出されて踊るも、早いリズムになるとやはり息がはずむ。夜に小雨が降った。

8月3日、7時半ーアリーキャンプ着12時半ームニール・キャンプ着15時15分

木下、藤原氏と3人でゴンドコロ峠越えに向かう。同行者はガイドのイサ、HPのグラム、コックのバッシールとポーター10人。他の4人は往路をアスコーレに下山。

出発時は曇り、周囲の峰は全て雲の中。藤原氏が途中から、急激に不調になる。夕食後から夜中23時半までテントの中で起座姿勢で口すばめ呼吸を続けさせ、早朝出発の準備をさせる。何度パルス・オキシメーターで計測してもSPO2値は50～56ぐらいにしか回復せず。ここでの最良策は高度を一気に下げさせる事だが、往路を下山させても、高度は徐々にしか下がらない。その上、長駆の燃料や食料もなし。後退の道は断たれている状態だ。

8月4日、1時半出発ー7時半ゴンドコロ峠(5,380m、パキスタン軍関係資料では5,700mの表示あり)ーヒュースパン(4,485m)着14時。(雪、強烈な吹雪、霰、雨)

雪が降り出している。ヘッドライトを点灯して出発。氷河上を歩き出すと共に、アンザイレン。藤原氏の荷物は小生が担ぐ。初めはハイポーターが藤原氏をザイル2本で汽車ごっこのように、曳きながら登るも力が尽きる。ハイポーターが背負ってクレバス帯のフィックスロープ部分、数百mを含めて猛吹雪のゴンドコロ峠まで担ぎ上げた。途中、持参した酸素を吸わせるが効果が全くない。峠に予定より3時間遅れの7時半に到着。本来、晴れている日なら、朝陽が照りだすと激しい落石が発生するゴンドコロ側の下降は避けるべきだが、逆層の急斜面に30～50cmの積雪有り。幸い落石発生頻度は少ないようだ。凍りついたフィックスロープを取り出し、スリングを利用して藤原氏が滑落しないように注意を与えながら数百mの非常に急な斜面を下降する。木下氏は8環を使って懸垂下降をする。G2登頂成功のイタリア隊ポーター2人は我々のガイドが首筋を捕らえて滑落を止めたが、背負っていた荷物は2つとも雪の斜面を谷間に消えていった。

石油のカンテラをさげてヴァイン氷河の急傾斜

の雪面で我々を追い越していったハイポーター達は早朝7時半に到着したヒュースパンに、我々はやっとのことで14時着。高度が少し下がったためか、藤原氏は致命的症状から脱したようだ。

この度の最大の楽しみはゴンドコロ峠からK2などカラコルムの全貌を眺める事だったが、目も開けておれない猛吹雪。山は甘くなかった。

8月5日、休養。(曇り、小雨、時に晴れ間程度)

夜半に小便のために、テントを出たはずの藤原氏はテント場からかなり遠くまで徘徊していたらしく、木下氏がテントに呼び戻している。藤原氏を下山させれば、また背負うような事にもなりかねない。テント内での動きも徐々に良くなっているので、休養日とした。

ここヒュースパンは4年前にベースキャンプにしたところだけに懐かしく、気持ちも落ち着く。

8月6日、8時出発—サイチョウ(3,315m)着18時前 朝；周辺は薄氷

終日晴れており、なつかしのタサブラッカ、ライラ、K7、K6、ナミカなど針峰はよく見えるのに、マッシャーブルムの頂上だけはガスの中で見る事が出来なかった。心配の藤原氏は昨夜にはしっかりと小便も出た。とに角、ゆっくりながら自力で10時間近く歩いてくれた。下山が遅くなったために氷河からの水流が多くなり、夏村のすぐ

下部の激流をハイポーターに背負ってもらって涉った。足を滑らせればゴンドコロ氷河本流に吸い込まれるような所でもあり肝を冷やした。氷河から溶け出た膝より深い激流を渡渉したハイポーターは、太ももまで真っ赤にして震えていた。シニアーにはこんなに冷たい水流の渡渉は避けたいものだ。

8月7日、7時半出発—フーシェ村着、ジープでカプルーに下山。

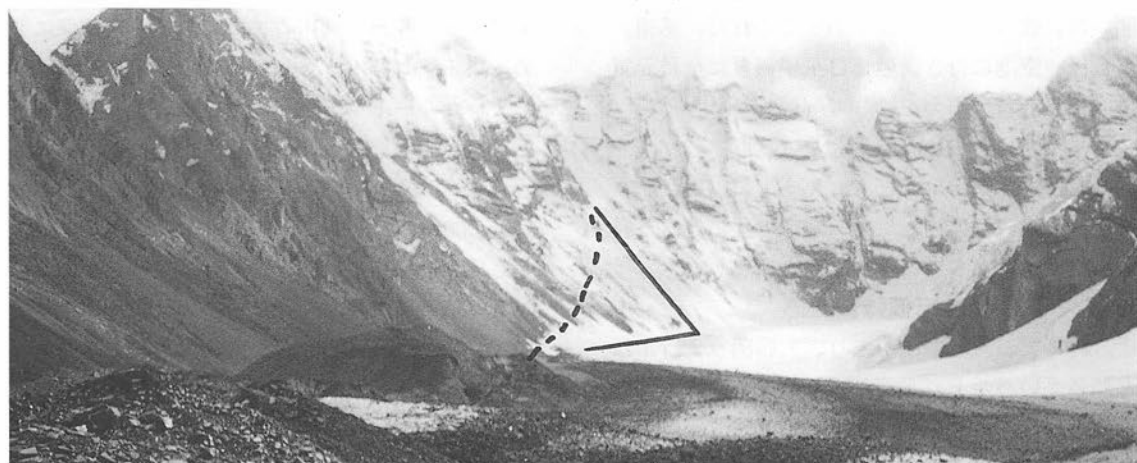
4度目の街道だ。マッシャーブルムが終日顔を見せてくれた。フーシェ村で旧知のモハメド・アリ・ガングルと再会し、東京外国語大学ウルドー語麻田豊教授夫妻から依頼を受けたご夫妻自身の最近の写真を手渡した。20年前に麻田夫妻は彼の家に滞在して、ウルドー語を研究された間柄。また、彼は4年前にサイチョウからフーシェ村までKGAC松田政男先輩を背負って下ろしてくれた恩人でもある。

ジープで下山途中、カンデ村が洪水で壊滅していた。橋も流されていたので300m程上流に歩いて、架設の1本橋を渡り元のジープ道で別のジープに乗り換える。そしてマチュルー村でガイドのイサの家に立ち寄り、カプルーではPTDCホテルに泊まる。数年前に出来たシャヨーク河に面した広々とした居心地の良いホテルだ。

8月8日、11時発—スカルド、K2モーター着14時半

夕方近く、飯田隊全員がK2モーターに帰着。

▼ヒュースパンからゴンドコロ峠への登り口



破線が新ルート：ヒュースパンキャンプ場から右岸山裾をトラバース気味に登り、氷河がフラットになった部分には下降せず、岩稜下部に向かって登る。上からの落石を受けなくて済むようになった。

実線が旧ルート：キャンプ場を出て右岸山裾をトラバース気味に登り、途中から氷河のフラットになった部分を岩稜直下まで詰める。そして一気に岩稜下部へ。上の落石があると非常に危険。

彼らもバルトロ街道下山は大変だったと。お互い無事を喜び合う。

8月9日、休養、今朝もイスラマバードへのフライトなし。これで4日間欠航だ。

8月10日、飯田、岡氏はキャンセル待ちで空港に行くも座席なく、搭乗できなかった。

私が1981年にカラコルムをトレッキングした時のガイド、現在バルティスタン・ツアー社イクバル社長の招待を受け、有志で訪問。旧交を温める。ガーデン・パーティーだ。庭にはプルーン、リンゴ、ブドウなどの木が沢山ある。奥さん手作りの料理と共に自分で採った果物は新鮮で実に美味しい。

8月11日、9時発ースカルド空港、10時半フライトキャンセル、一旦K2モーターに戻る。

コースター1台で隊員とスタッフ3人が再度K2モーターを11時半出発ーチラス20時過ぎ着、パノラマホテル泊。夜空には3万年振りに地球に大接近中の火星が大きく輝いている。

8月12日、6時発ーイスラマバード20時前着、ラベンダーホテル泊。

8月13日、11時から登山局でデブリーフィングを行った。夜は屋上でシュラフを広げて、夜半過ぎまでペルセウス流星群の見物。月明かりがあるも結構観察できた。

8月14日、ニッパのスタッフを招いて、打ち上げ昼食会を木陰にある露天のパキスタン料理店で開いた。彼らは本当に良くやってくれた。感謝。夕食後、空港に行き、翌15日正午過ぎに全員元気に成田空港着。再会を約して解散した。

この山行で受けた教訓

トレッキングといえどもヒマラヤの山奥だ。メンバーの構成は体力、気力、知識と共に豊富な経験を有する者たちであるべきだと痛感した。

*忘備録、雑感

1. 汚くて、人糞の山があり、大腸菌うようよなど悪名高いバルトロ氷河だったが、この氷河奥の巨峰を目指す大きい遠征隊はここ2〜3年ゴンドコロ峠を越えて入山するので、毎日出会うのは2〜3人のトレッカーと彼らのポーター達のみで全く閑散としていた。その上、沢山の便所棟がジョラとバユーに設置されるなど環境整備も影響して

いるのだろう。キャンプ地は勿論のこと道端にもゴミは無く、大変きれいになっていた。

2. バルトロ氷河舌端部から数百mほど下流の左岸に、パキスタン軍の兵站基地があり、バルトロ氷河上に散在する基地への運搬・補給に100頭ほど軍馬が従事している。折角クリーンになった氷河上が馬糞ルートになりつつあるように思われる。

3. アフガニスタンとイラク侵攻の影響で、アメリカ人やイギリス人がイスラーム国であるパキスタンを敬遠して登山、トレッキングに入っていない。その結果、ポーター達の出番が少なく、賃上げのネゴをしないので気分的に楽だ。

4. ジョラ近くに架かる橋は以前プリー式で各自ロープを手繰りながら渡ったものだが、馬も渡れる立派な吊り橋になっている。バルデマルから少し先の渡渉箇所なども架橋をして欲しい。

5. ゴンドコロ峠はバルトロへの近道として、近年クローズアップされてきたが、落石が激しく未明にしか通過できなかった。ゴンドコロ峠の「レスキュー隊」は3年前にフーシェ村の若者により結成された。ゴンドコロ氷河のどん詰まりからゴンドコロ峠(5,700m)までゴンドコロ側の落石の頻発する逆層の急斜面数百mに固定ロープを張り、峠から先のヴァイン氷河(下方でバルトロ氷河に合流する)側では数百m、急傾斜で大小クレバスが散在する氷河上部に固定ロープを設置した。使用料金をとるものの、固定ロープのある区間はレスキュー隊員が利用者に同行して安全確保に努めている。ゴンドコロ氷河のどん詰まりから直登していたルートをトラバースの多いルートに付け替えて、上の登山者が引起す落石を極力避けるよう考慮している。利用料は我々3人でRs2,500(約5,000円)。因みにヒュースパンではテント1張りRs100。

5年前の7月、フーシェ村訪問時には雪のために、峠越えが出来なかった。3年前からレスキュー隊のメンバーが夏前にルート開発をするので、登山隊のバルトロ入りを可能にしている。また、登山局もこのレスキュー隊を公認しており、傷ついたロープなど交換するように指導をしている。

(20ページ右欄に続く)

パキスタン登山情報

1. 最近のパキスタン

10月6日16時25分頃、イスラマバード市郊外にてアザム・タリク氏（スンニー派：イスラム原理主義に近い政党の党首）と、他4名が射殺された。それにより、犯人逮捕までに不測の事態が強く懸念されていたが、その後1ヶ月間、何事も無く終わった。しかし、当分は注意したい。

印パ関係は、夏にムンバイで起こった連続爆破テロ以来、再度インドのパキスタンテロ関与が叫ばれているが、ムンバイのテロも国内犯行説もでており、100%パキスタンの関与が証明されたわけではないので、うやむやになってしまっている。カシミールに関しては、相変わらず毎日軍隊の出動がなされ状況に変化はない。あげるとすれば、秋に入ってからパキスタン国内で、インドのカシミール弾圧反対と言う運動が盛んになった。イスラマバード市内での横断幕も、外務省前やインド大使館入り口に掲げられていた。

アフガニスタン、イラクと、近隣諸国でのアメリカとの戦争が続いているが、パキスタンは、両国ともつかず離れず静かに状況を見守っている。

しかし、やはりアメリカの介入は避けられずに、小国パキスタンとしては、大国（この場合は、中国を指す）に頼らざるを得ないところから、関係強化の努力をしているのが現状である（ムシャラフ、ジャマリの訪中）。

2. パキスタンの登山

「申請」

パキスタンにおいて、6,000m以上の山を登山するにあたっては、登山許可の取得が必要である。登山予定年の前年12月末日までに申請をすれば、解禁されている地域の山について許可が下り、登山をする事が出来る。6,000m以下の山域でも、制限区域に属している場合は許可取得が必要である。しかし、6,000m以下の場合は、パキスタン入国後、観光省にてトレッキング許可を取得して登山が可能である。その件については、トレッキング・ピークとなるので、別にトレッキングの項

で改めて述べることにする。

以下の内容は、6,000m以上の登山が対象である。

①申請書類の提出

申請書類は、観光省発行の「登山規約集」ANNEXURE A、ANNEXURE B を2部作成し、登山料の領収書のコピー（払込先は、別添参照）を添付して、在日パキスタン大使館もしくはパキスタン現地の観光省へ提出する。

（提出書類や、領収書は、必ずコピーを保存する）

〈ANNEXURE A を記入するにあたり注意〉

- a. 申請時に登山隊の人数、隊員の詳細等が決定していない場合は、隊長のみの申請が可能である。他の隊員は、決定し次第、大使館／観光省に通知する。その場合、遅くともパキスタン入国の3ヶ月前までに通知する。パキスタンに到着後のメンバー変更、追加等の申請は、通常約10日間以上の時間がかかり、その分登山隊の出発が遅れることになる。
- b. パキスタン入国日の記入は、連絡将校（リエゾン・オフィサー）がイスラマバードへ入る予定日にもなるので、分かっている範囲内で正確に記すこと。
- c. 現在、1座に対しての登山隊数制限が行われていないが、同じ山に申請が集中した場合は、制限されることもあるので、第2、第3希望を明記すること。
- d. 希望する山へのルートは、キャラバンルートも併せて明記すること。特に、入山時／下山時、隊を分割することはできない。但し、観光省登山局から許可を得た上で、ガイドの同行の下（BCが制限エリアの場合は、政府公認ガイド）分割された隊の途中入／下山が可能である。
- e. 申請記入事項9は、大凡の数を記入すればよい。
- f. テレビ局が同行する隊は、申請書類記入事項15に詳しく内容を記入すること。同時に、情報省からの許可も必要になるので、大使館へテレビ局からの取材申請を行う。

g. どの書類にもいえることであるが、サインはパスポートと同じであること。

〈ANNEXURE B を記入するにあたり注意〉
氏名、パスポートの詳細、生年月日は、正確に記入すること。各隊員の詳細は、観光省を経て、内務省で審査後、登山許可が交付される。記入事項に誤りがあった場合、ブリーフィング時に、他人と認識され、再申請／訂正申請の手続きが必要になる。その手続きには、10日間前後要するので、その間ブリーフィングができない。

もしも、申請時にパスポートを申請中の場合は、7～9の項目を「Applied for」（申請中）と記入して申請が可能である。しかし、パキスタン入国の3ヶ月前までには、発行されたパスポートの内容を追加申請しなければならない。

また、ビザ取得時には、3ヶ月以上期限のあるパスポートでなければならないので、申請時には、パスポート期限も確認する。

②登山料（ロイヤリティー）

パキスタンでの高峰登山には、下記の登山料が必要である。登山料は7名までの料金であり、8名以上1名増すごとに追加料金が加算される。
払込銀行：National Bank of Pakistan

（パキスタンで直接振り込む場合は、イスラマバード本店：メロディー・マーケット）

払込名義：Ministry of Culture, Sports & Tourism, Tourism Division, Government of Pakistan

口座番号：1391315-Other Receipts-Fees, Fines and Forfeiture-Royalty, Pollution and Trekking Fee.

注意：口座番号が2001年より変更になった。規約集を持っている者は、注意すること。

山の高さ	登山料
K 2	12,000 \$
8,001～8,500m	9,000 \$
7,501～8,000m	4,000 \$
7,001～7,500m	2,500 \$
6,000～7,000m	1,500 \$

注意：1999年発行の規約集には、8,000m～8,500mが、9,500 \$となっているが、9,000 \$の誤りがあるので、注意すること。

8人以上1人増すごとに加算される額	
K 2	2,000 \$
8,001～8,500m	1,500 \$
7,501～8,000m	800 \$
7,001～7,500m	300 \$
6,000～7,000m	200 \$

注意：規約集を持っている者は、2000年より、上記の金額に変更になったので注意すること。

③申請日

登山申請の受付は、登山を予定している前年の、1月1日から12月31日までである。登山規約においては、このようになっているが、人気のある山域には早めの申請が望ましい。前年の9月頃までがよい。以前は、K 2のみ2年前からの申請であったが、他の山同様に前年申請になった。（特例として、12月31日以降も、受け付ける場合があるので、期日が過ぎても観光省登山局に問い合わせるとよい）

④パキスタン人との合同登山の申請

パキスタン人との合同隊の申請は、外国人のみの申請に加えて、パキスタン人隊員の詳細を別添ANNEXURE Iの形式で提出する。また、ANNEXURE Aの11～14の項も記入しなければならない。パキスタン人が隊長（パキスタン人主体の登山隊）の場合、11～12を記入する。外国人が隊長（外国人主体の登山隊）の場合、13～14を記入する。

パキスタン側隊員は、パキスタン山岳会もしくはアドベンチャー・クラブの会員でなければならない。

登山料は上記の半額になるが、申請時は全額納め、後日半額が返却される。

注意：申請は隊各自で行っても、エージェントなどの代理申請でもよい。

「取得」

登山許可は、申請後約3ヶ月（観光省が混雑している場合は、もう少しかかる）で申請の際に記した隊長の住所へ、隊長宛に郵送される。内容は必ず確認すること。

登山許可発給後、記載事項に不備があった場合は、ただちに大使館／観光省に申し出て、訂正してもらうこと。パキスタン到着後に、訂正／変更

を申し出ても受理されない場合もある。また、受理されたとしても、時間がかかりブリーフィングが遅れる場合もでてくる。

登山許可の他に、注意事項が記された用紙が同封されているので、よく読んでおくこと。

また、同封書類の中に、登山隊の概要を尋ねる書類もあるので、必要事項を記入の上、速やかに返送する。この記事項の内容により、連絡将校（リエゾン・オフィサー）のイスラマバード到着日が決定されるので、隊のパキスタン入国日は正確に記入すること。

注意：登山許可証は、来パ時に必ず携行する。登山許可証は、ビザ申請時やスカルド／ギルギット／チトラル／チラスの知事事務所への登録時には必要なので、数枚コピーをとっておく。

参考：申請時に登山隊の連絡先／住所を、現地利用エージェントにすることも可能である。その利点は、許可等の結果が早く分かるということである。

3. 来年の情報

来年は、K 2 初登頂50周年にあたり、「K 2年」と銘打ってイベントや、登山料の半額を予定しているが、11月5日現在、未だその通達は、観光省から出されていない。

今年は「ナンガ・パルバット年」であったが、正式に書面で発表されたのが、昨年の12月17日なので、今年もその位まで待つべき。昨年の書類を見るとその日付に、書類番号1(1)/2002-OP/-によって発表されている。

4. 今年の登山状況

今年の登山隊は、5月までに申請がなされた隊は72隊あったが、その後実際に登山料を支払って登山の予定を立てた隊が57隊であった。

そのうち、4隊がキャンセルをした。登頂した隊は29隊である。

事故は、G 1でスペイン／アルゼンチン合同隊が2名死亡、ウクライナ隊が1名死亡。K 2スイス隊が1名死亡。G 2でイラン隊が1名死亡。バスーでは日本ヒマラヤ協会隊が1名死亡している。

入山状況は、やはり、G 2が一番多く、17隊が入山した。それ以外は、G 1：10隊、ブロード・ピーク：7隊、K 2：6隊、スバンティーク：6隊、ナンガ・パルバット：5隊、キンヤン・キッ

シュ：4隊、その他、ユトマルサール、マルビティン、チョゴリサ、G 4、マッシャーブルム、バスーにそれぞれ1隊ずつ入った。

5. トレッキング

〈6,000m以下の山〉

パキスタンに於いては、6,000m以下の山／山域には、トレッキング許可で登る事ができる。オープン地域では、何の手続きもせずに登山／トレッキングが可能である。

しかし、手続きは不要であるが、パキスタンの山歩きは、ジープを降りるとすぐ氷河歩きが始まるので、ガイドを必ず同行させる必要がある。

制限地域に関しては、パキスタン到着後観光省に於いて手続きをして入山する。これは、必ずガイドの同行が義務付けられているので、そのガイドやガイドの所属する旅行会社に任せる事がいちばん簡単な方法である。

〈制限地域の入山手続き〉

①入山料／保険の加入

* National bank of Pakistanにおいて、一人50 \$の入山料を納める。

* 銀行周辺の文具店や、行政書士窓口にて「Form-A」を購入し、必要事項を記入して3部コピーを作り、銀行窓口を持参する。この支払いはUS \$に限る。

* 保険は、入山者の為ではなく、ポーター、コック等にかけるものである。

* 加入保険会社は、観光省指定で行う（何処でも良いと言うが、多分癒着しているのかも。他社だと有事の際に保険が下りない場合があるので、悔しいけどここです）。

『保険会社』ALPHA Insurance Company

☆ラワルピンディー事務所：43-C, National Bank Compound, Bank Road, Rawalpindi
TEL：92-51-568349／562249

FAX：92-51-519201

☆イスラマバード事務所：Suite 19/20, 2nd Floor, Hill View Plaza, 76E, Jinnah Ave., Blue Area, Islamabad

TEL：92-51-274032～4

FAX：92-51-274964

②ブリーフィング

「トレッキング規約集」にあるANNEXURE A (入山届)を作成して、写真2枚、①のレシート類、ガイドのライセンス・コピーとともに、「ブリーフィング願い書」をつけて観光省に提出する。観光省はそれを受取った時に、ブリーフィングの日時を指定する(だいたい、その当日か翌日には、必ずブリーフィングできる)。入山希望者は、その指定された日時にガイドと共に、観光省へ出頭する。

③入山

登山基地となる町(ギルギット、スカルド、チトラール)に到着したら、警察署、DC・オフィス(副知事事務所)に、観光省から署名/捺印を受けた入山許可証のコピーを提出する(これは、登山隊と同じである)。

また、雇用したポーターの氏名/IDカード番号を確認して、保険書類に記入する事(これ

らの手続きは、ガイドが行うが、流れは、覚えておくこと!)

④デ・ブリーフィング

山から帰ったら必ず観光省へ出頭し、下山報告をしなければならない。この場合も、下山した旨を観光省へ連絡し、デ・ブリーフィングの日時を訊く。指定された日時に出席するのは、ブリーフィング時と同様。最近のパキスタンでは山域の環境保護を呼びかけているので、環境破壊があった場合は、それなりの罰則があるので注意すること。

登山隊、トレッキング隊ともに、1ヶ月(30日)を越す滞在には、外国人登録が必要である。2001年9月11日前には一時不要になったが、2002年に復活した。

(情報提供：日・パトラベル)

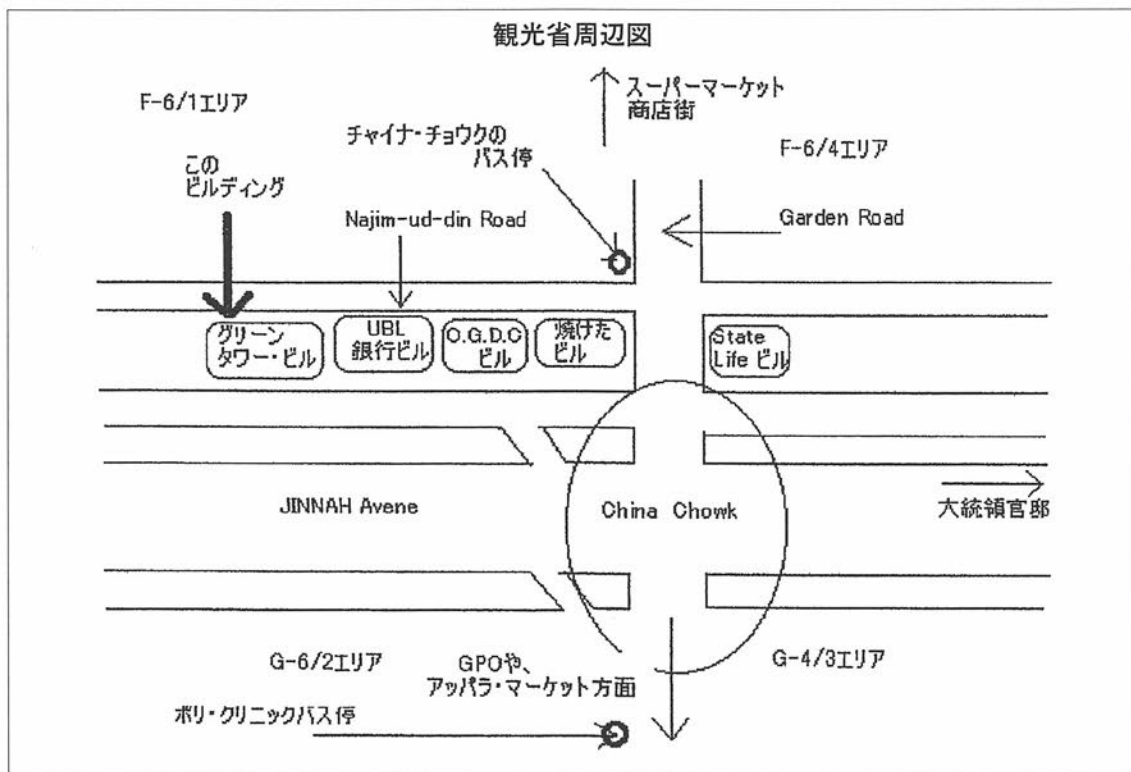
観光省所在地(2003年1月に移転したので注意!!)

住所：Ministry of Tourism

Expedition & Trekking 11th floor Enclave Trust Building (Green Tower)

Adjacent to UBL Building Near China Chowk Blue Area Islamabad

なお、Tourist Servicesは、7階にある。



ロー・マントンの空、遥かなり(17)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

ーブリクティ発見ー

高橋 照

ナッカリ・ダモダール・クンダは、ヒンドゥの聖地であると同時に、ラマ教の聖地でもある。ムスタン国王は「本物の聖地」サッカリ・ダモダール・クンダには仏教徒として来たことがあるということだが、私達のBCのあるナッカリ・ダモダール・クンダには未だ巡礼に来たことがないそうである。

「ニセ物」のナッカリ・ダモダール・クンダは聖地にふさわしく、北はデー・チャン・コーラ源頭の大削壁の連なる5,000m台の山々、西は「聖地の扉」といわれている5,265mの険しい岩山、そしてメ・ラ峠の4,850mの大きな「入口」、南はブリクティの前山の大岩壁、そして東にはサムマル・コーラ(Sammar Khola)の奥にブリクティの山群が奥深く続いている。そして、サムマル・コーラの入口は懸垂氷河を頂いた岩山と、それに連なる大障壁があって、一つの盆地状の地形を形成している。そして、私達のBCの下方には聖なる池「ナッカリ・ダモダール・クンダ」があった。そして、デー・チャン・コーラの荒々しい谷がロー・マントンの方角にこの山に囲まれた地域を削りとって、ただ一つ地平線の果てに大空を明けていた。BCの高度は4,450mの高さだった。

BC附近は、今や若芽を出したばかりの牧草が3センチ程に伸び、あたりには小さな池塘もあって、サムマル・コーラから流れる支流が小さなせせらぎとなって流れていた。このナッカリ・ダモダール・クンダには二ヶ所に遊牧民の天幕が張ってあって、彼等の家畜であるヤクは50頭ぐらい、山羊も千頭近くも放牧されていた。ナッカリ・ダモダール・クンダに積もっていた雪も、春の訪れと共に解けてきたので、極く最近デーの村から放牧に上がって来たようであった。カラガナの灌

木がいたるところに生えているので、燃料には全く困らない。水も豊富だし、薪も無尽蔵にあり、そして草地のこの地域はベース・キャンプ地として格好の場所を私達に提供してくれた。ヤクの乳も遊牧民のボテ達が持って来てくれたし、贅沢さえ言わなければ、チャンもヤクの燻製肉も手に入った。

私達がこのナッカリ・ダモダール・クンダにベース・キャンプを設営した翌日は、サムマル・コーラの上流に前進キャンプを作るべく、全員で前の氷河を登りつめ偵察を行った。そしてTBSの3人と金子さんはナマの第一デポ・キャンプより一日でベース・キャンプ入りを敢行した。彼等は夕方の5時過ぎにポーターの一部と一緒に10時間近くもかかって強行して来たのである。彼等がBCに着くと間もなく雪になり、しかも大降りの雪になって、暗くなるまでに30センチも積もった。

全員でメイン・テントの中で夕食を食べていると、コックのニマ・トゥンドップが、ポーターの一人が今日カムバの間道のコル附近で荷物を谷底に落としてしまったと報告して来た。これはポーター達の口こみで伝わって来た事実であった。菊地君が早速積荷の番号をリストで点検すると、紛失した荷物はどうもLPGのコンロと、酸素関係の器具のようだった。

ところが、その荷物を落としたというポーターは夜8時になってもBCには着かない。しかも、ほかのポーター達の話では、彼は半袖シャツと半ズボンだったというので、この雪降りの中では、途中で引き返したのではないかと思われた。ナイケは、

「奴はサーブに怒られると思って、逃げ帰ったのかも知れせんよ」といったが、もし逃げ帰って

▼聖地の扉の山



いないとすると、この雪降りの山越えは極めて危険なものであった。私達の常識でいったら、裸どうぜんの姿で雪の中で動けなくなったら凍死はまぬがれなかった。それ故に、この雪の中ではポーターの生命が危ないと菊池隊長は判断し、「おい、みんな聞けよ。ポーター一人殺したら大変なことになるぞ！ そんな事態になったら、遠征も明日限りで中止だ。われわれのような貧乏隊では、ポーター一人分の保証費用だって持っているわけがない。だから、是が非でも全員で捜し出し、救出しなければならない」とそういって、捜索隊を三つのパーティに組んで、直ちに出発した。雪はいよいよ激しく降りしきった。

私とTBSの寺田さんの二人は、トランシーバーのスイッチを開けたままで、メイン・テントでまんじりともせず待機した。気温も下がっているのか、天幕内でもかなり冷え込んで来た。

夜中の12時頃になって、隊長の菊地君の声がトランシーバーに入ってきた。

「土谷パーティ聞こえるか」

「三笠パーティはどうだ」

「佐久間パーティも聞こえるか」やがて、

「今丁度12時になったところだ。これ以上探しても発見できなければ無駄だと思うので、一応捜索を打ち切りにし、明朝改めて捜索隊を出すから引き上げてくれ。みんな了解したか。判ったらパーティごとに返事をして下山しろ」その時である。佐久間が大声で菊地君にコールを送って来た。

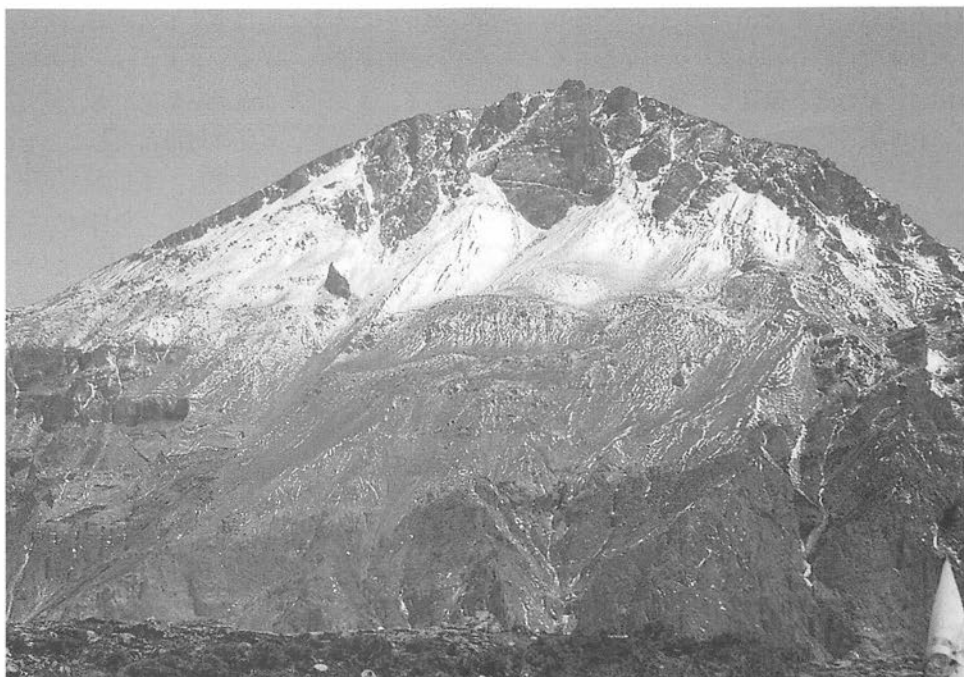
「隊長！ 見つけました。雪の中にうづくまっています、生きているのか死んでいるのかまだ判りません」

それからは、トランシーバーより流れてくる佐久間の声をたよりに全員遭難現場に集まった。そして、倒れているポーターはまだ息はあったが、意識は全くなかった。佐久間がテルモスのお湯を飲ませると段々と意識を取り戻し、自力で歩けるようになるまで快復して来た。そして佐久間の着ている羽毛服を着せてもらい下山を開始し、救出は成功したのである。この生命力の強さにはただただ驚嘆に値するものであった。夜中の1時過ぎに降りしきる雪の中を佐久間にかかえられるようにしてポーターは生還した。真夜中にシンシンと音もなく降る雪は、灰色がかった黒い雪に目にうつったが、TBSの録画撮りのライトに照らされた雪は、銀色にかがやいた真っ白な雪で美しかった。それからポーターは、皆にだきかかえられながら、炊事場の赫々と燃える焚火のそばに運ばれ、彼の命は救われたのである。

それから全員がBCに帰幕したのは、朝方の2時近かったのであった。ポーターは上衣もズボンも着替えを持っていたのだが、隊貨と一緒に岩場から落としてしまったのだった。

翌日はポーターの遭難さわぎで、全員一睡もしていなかったので、休養日とし、隊貨の整頓などに当たったが、浅見と三笠は、遭難現場に行き、散乱した酸素器具やコンロなどを拾い集めて夕方近く帰って来た。遭難現場は、私が通ったカムバの間道のコル附近の岩場で、器材はゴーマル・ゴート・カムバ・ケームの真上の岩壁からおちたのである。彼は隊貨を落としてから拾い集めようと努力したが、地形的にとっても無理だと判断し、ゴーマル・ゴートに下りてメ・ラを越え、その途中で雪の中で気を失って倒れたのであった。兎に角、これで私達は遠征を中断することなく続行することが出来たわけである。

翌日の5月13日は、天気はあまり良いとは言えなかったが、佐久間、土谷、遠藤、キショール、タシの5人はC1の予定地を探すべく早朝に出発した。まだ、ブリクティは何処にあるのか全く雲を掴むようで、その位置すら判らない。せめて姿でも垣間見たいものであった。ベース・キャンプを設営した現在では、もう登山活動のみしか残されていなかった。ウルベガックよりの最後の荷物



も昨日上がって来たので、数名のシェルパ・ポーターのみ残して全員解雇した。私達には高い給料のシェルパ・ガイドを使う余裕もなく、又、この山群では隊員とナイケ二人を含む数名のポーターで充分だと判断したからである。菊地君は偵察隊の後を追って単身一時間後の8時に出発していった。菊地君はポーターの解雇で給料払いの仕事があったため出発が遅れたのである。私達は貧乏隊なので、隊長の菊地君は一人で、隊長、ドクター、会計、記録、マネージメント、通訳、渉外、輸送等多くの仕事を一人で引受けていた。本日は昨日休養日なのに、カムバの間道まで荷物を拾いに行った浅見と三笠はBCに残留させた。そして、夕方の5時を過ぎてから偵察隊全員は戻ってきた。C1の予定地は高度5,400mのサムマル・コーラ上流の氷瀑の上の台地に決定した。この日、6,000m台のピークを発見し、発見した順にP1、P2と名付けた。しかし、この山がブリクティであるかどうかはまだ決定する段階ではなかった。

5月14日は、朝暗い中より雪が降り出し、ベース・キャンプ附近でも朝起き出した時は20センチ以上の積雪を見た。前方（西方）に広がるムスタン高原も、カリガンダキ流域まで降雪があり、乾燥地帯のムスタン高原も白一色に覆われてしまっ

た。この季節に、山岳地帯は別として、ロー・マンタンの高原に時ならぬ降雪があったということは、何年に一度かの異変に相違ない。ロー・マンタン地方は、麦の作付けをしてから間もないはずなので、被害はかなりの広さでひろがっているものと思われた。後で下山後ケサン・ナムギャル氏の話では、この時ロー地方は1メートル近くも積雪があったと聞かされたが、話半分としても私達のベース・キャンプ附近よりもだいぶ積もったに違いない。道理で、BCの積雪は一日で消えたのに、ロー地方は一週間近くも白一色の積雪に覆われていた。今日は午前10時頃には雪は止んだが、一日中ホワイト・アウトでC1の建設は一日延ばし休養することにした。

翌日はC1入りする佐久間、土谷、タシの三人に、隊員ボッカ4名、シェルパ・ポーター4名の計11名が8時に出発して行った。今日もガスの間から時々ロー・マンタン地方が望まれたが、ベース・キャンプ附近とは異なり白皚皚である。低地にはかなりの雪があったようである。夕方ボッカ隊の最後が帰って来たのは6時を少し廻っていた。

5月16日には4人のボッカ隊もC1泊まりの予定で出発した。午前11時の交信で、C1上部のルート工作をしていた佐久間より、ブリクティらしい

山を発見したといって来た。

私達は本日までに、これがブリクティだろうと思われる山に、それぞれ発見した順に、P 1、P 2、P 3、P 4と一応仮の名称をつけておき、それぞれを一つ一つ登って高度を確かめることにし、その上地形的に判断して、チベットとムスタン地区とマナン地区の国境にあるかどうかを調査することにしていた。ところが、本日佐久間が梯形の山P 4に向かっていた時、その奥の方にもっと大きな山を発見したのであった。そして、その山を一応P 5と名付けることにした。米軍のパイロット・チャートと照合すると、P 5がブリクティの主峰であると思われたので、明日はP 5に近づくルート工作することに決定した。

この日、ロー・マンタンに帰っている、ケサン・ナムギャル氏より手紙が届いた。手紙を持って来たロー・パはわずか2日間でBCのあるナッカリ・ダモダール・クンダに到着したのである。手紙によると、ローには何か秘密の問題があって、ムスタン国王のロイヤル・ファミリーであるケサンさんでさえ、写真撮影が極めて難しいといって寄越した。一体ローにはどんな秘密がかくされているのだろう。ケサンさんの手紙はその点には全く触れていない。そして、金子さんやTBSスタッフ

がローに入ることは全く不可能で、ネパール政府の御用新聞のライジング・ネパールの新聞記者である、キショールがローに来て、多分写真撮影は勿論のこと、ローの城内に入ることも難しいのではないかと行って来た。そして、金子さんにはチュクサンで会いたいので、明日にでもBCを出発して、チュクサンで落ち合いたいといって来た。又、TBSから依頼されている国王とのインター・ビューは、国王がOKしているので問題はない。だが会うところがチャランよりタンゲの方が都合が良いと思う。タンゲ村には国王自身の用事があるということを、政府の役人であり、内務省のラージャのお目付役が知っているので、その方が口実を作りやすい。又、5月20日より25日までは、ムスタン最大の祭ティージュがあるので、その間はローを抜け出すわけには全くいかないので、そのティージュの祭の前後しか日程が組めないといって来た。5月20日前にタンゲ村でラージャとインター・ビューするのはベターだったが、それにはもう時間がなかった。そうすると、25日以降の28日頃が適当だと思われた。その頃までには登山活動は終了させる予定でいたからである。いずれにしても、5月28日か29日にタンゲ村でラージャにお会い出来る機会を作って貰うよう連絡する必要

▶ 降雪のロー・マンタン地方



▼遊牧民様々



があった。さいわい金子さんが明日ベース・キャンプよりチュクサンに向って手紙の依頼通りに下山すると思うので、チュクサンで金子さんよりケサン・ナムギャル氏にその旨を国王宛手紙を送るより外に手だてはなかった。と同時に、確実にタンゲ村で会えるかどうかの情報も、チュクサンよりBC宛に手紙を送って貰う必要があった。

その夜夕食の席上で金子さんは、

「私の本職のフィールド・ワークが、ベース・キャンプにいただけでは何も出来ません。ここに止まっても現在の状況では全く意味がないんです。それに大学の方も来月からスケジュールが沢山つまっていますので、明日单身山を下ることに決めました」

「先生お一人で大丈夫ですか？」と私が聞くと、「エー、大丈夫です。この先の天幕にいる遊牧民の連中に馬一頭借りることと、ポーター二人を雇うことをさっき決めたばかりです。そして、遊牧民のボテは村に帰って準備をしなくてはならないようなので、明日はボテと二人で下りてデーの村に泊り、翌日タンゲ村に出るつもりです」

これで金子さんが下山することと、チュクサンでケサンさんに会うことは確定したわけである。ところが、その話を察知したリエゾンのピーム・バードルは、

「私も先生と一緒にジョムソムまでお供します」といい出して来たのである。

「君は登山隊のリエゾンなのに、ベース・キャンプを離れてもいいのかね」と私が質問すると、

▼山羊の放牧



「金子先生を一人野放しにしてジョムソムまで帰すわけにはいきません」といい出して来た。どうやら金子さんが、外の道を通ってジョムソムに帰るのを極力阻止する気構えであるようだった。

またしても、リエゾン・オフィサーの雲行きが怪しくなって来たのである。

(10頁より続く)

6. 『ゴンドコロ峠越え』をトレッキングの範疇に入れるのは難がある。頂上に登るのではないが、峠といえども5,700mの標高有り。酸素濃度は平地の半分以下。ヴァイン氷河上はムニール・キャンプを出ると直ちに雪崩でできたデブリの上を歩き、傾斜は次第に急になり、大小クレバスが出てくる。峠までこのクレバスの間をぬって固定ロープを数百m設置してあるが、ユマールを使う登山そのものだ。無数にあるヒドンクレバスに落ちる可能性もある。ザイル・ワークも必要だ。アンザイレンしているが、落ち込んだクレバスから自力で脱出する技術も必修の世界だ。ガイドはこんな猛烈な吹雪は初めてだと言っているが、現実には厳冬の山の状態になった。悪天候になったといえ、このような厳しいカラコルムの5,700mの峠越えを、歩けば行き着けるといった安易な響きのする『トレッキング』と呼ぶのは非常に危険だ。

7. 道中全員がダブル・ストックを使用した。また、トレッキングに入ってから、朝と夕方にパルス・オキシ・メーター（この度は2台持参）でSPO2を測定し、各自の健康管理に努めた。

高橋(旧姓 山田)敏雄君のこと

志小田美弘

彼と出会った大学1年生の頃、彼はちょっと伸びた丸刈り頭で、ジーパンに色の抜けたエンジのビニロンヤッケを着て、サブザックを背負って通学していた。服装などには無頓着で、その実直で飾らない言動がとても新鮮であったことが印象にある。

彼は岩登りはあまり得意とはしなかったが、彼とザイルを結び、彼の確保で登る時の安心感は他とは比べものにならなかった。それは、彼の人間性からくるものであると思っている。

シゴカレた大学山岳部時代であったが、共に生意気盛りでもあった。その後「卒業しても、山から離れないでいよう。」が合言葉になっていったが、学生時代の純粋さのままで、素直に自分の山に向かう彼を見る時、自分自身の純粋さや行動を問い直すというようなことが度々あった。

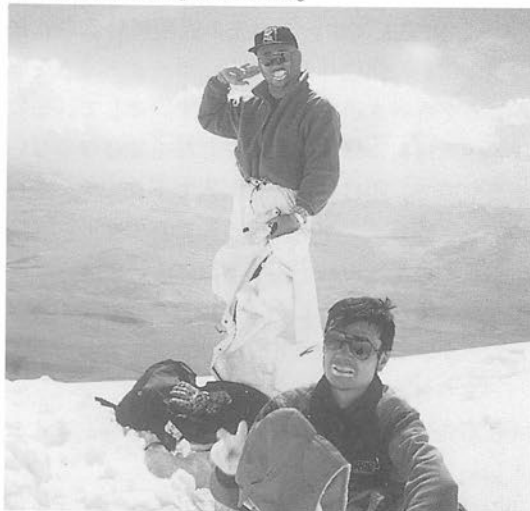
ヒマラヤでも国内の山でも、いつも他人を気遣いながら、進んで重い荷物を背負った彼は、教師としての生活も大事にしながら、自分の山へ向かった男であった。彼は人生の中での山の優先順位を下げることはなかった。そしてその中で、マラソンやトライアスロンも楽しんだ。まだまだやりたいことはあったのだが…………。

これまでの人生を彼と重ね合わせ、未来も共有しようとしていた人間たちにとって、彼を失った



▲1986年チベット、チョー・アウイ(7,354m)にて
悲しみは表現のしようもない。私は今後の生き方について、改めて彼に重ねて考えようと思っている。

カラコルムの地で、風になった山田君は私の中で今なお、生き続けている。



▲1997年ニンチン・カンサ(7,206m)にて(上)



▲1993年ムスターグ・アタ(7,546m)にて(左)

トピックス

野沢井歩前専務理事告別式

ヒムルン・ヒマールで遭難死亡した野沢井歩前専務理事の告別式が、10月25日（土）水戸で執り行われ、北海道、九州など全国から約300名が参列し、故人を偲び別れを行った。

H A J 関西集会開催される

秋も深まった11月8日（土）、大阪市東成区の「セルロイド会館」会議室に於いて、「H A J 関西集会」が開催された。

司会進行を京都在住の林雅樹常務理事が担当。午前10時過ぎ、愛媛在住の岩崎洋常務理事の開会挨拶の後、この集会の発案者でもあった野沢井歩専務理事に全員で黙頭を捧げ会議に入った。

初めに林常務理事が「東ネパールを語る」と題して、2002年秋のカンチェンジュンガ山群タルン峰登山の模様を報告し、登山後実施したカンチェンジュンガ北面の探査報告を行った。

続いて地元大阪の大西保評議員が「西ネパールを語る」と題し、このところ通い続けている北西ネパールの山々について報告し昼食となった。

午後は、野沢井専務理事が隊長として登山した「ヒムルン・ヒマール」登山の模様が、派遣母体であるバーバリアンクラブ・今村裕隆氏（H A J 評議員・山口県徳山市在住）から報告され、事故原因となった雪崩の模様が語られた。

引き続いて山森欣一理事長から「ヒマラヤ登山遭難事故対策」と題して、現在のヒマラヤ登山愛好者の意識の変革に対応するために、①海外登山情報センターの開設、②登山共済機構の開設を登山団体が協力して早期に立ち上げる必要があることが力説された。また、高所登山を実践する登山者が理解していなければならない「高所順応の基礎知識」が浸透していないために起きた事故が紹介され、クレバス転落事故例について幾つかの問題点が指摘された。さらに③外国に日本語の山の書籍を送る運動、④女性の八千メートル14座登山を目指し、中高校生に働きかけを！などの提案が

あった。

山岳ガイドの木本哲氏がカナダの大岩壁に挑んだビデオが放映され、氏がこれまでにヒマラヤなどで行った大岩壁登攀について紹介があった。

次いで、東京農業大学の中村和貞氏が、今春行ったローツェ〜サガルマータ連続登山について報告があり、同時に行った環境保護の実践と調査についても合わせて紹介された。

最後にパキスタン情報を岩崎常務理事、ネパール情報を大西評議員、中国情報を山森理事長が紹介し、山森理事長の閉会の挨拶で午後6時会議を終了した。参加者は四国、中国、関西の会員と会員外合わせて46名。

会議終了後、同所において懇親会が開かれ、参加者の自己紹介を含めて和やかに楽しい一時を過ごし、午後8時半前に解散となった。

なお、今回の集会は、冒頭にあるように、野沢井専務理事の発案によって準備されたが、林常務理事、大西、樋上嘉秀両評議員が中心になって実行された。当日は中村広会員をはじめ関西在住の会員の協力によって実りのある会となったことは、企画した野沢井専務理事の夢の一つが実現されたこととなり、関係各位に厚く御礼申し上げます。

ヒマラヤから

冬期ローツェ便り

ナマステ!!

日本では秋も深まり、移りゆく四季を肌で感じる頃と思いますが、いかがお過ごしでしょうか。

私達登山隊は、第一関門シシャパンマにメンバー5人そろって10月14日に登頂し、高所で行動できる体作りを終えて、カトマンズにもどってきました。しばらく休養をとり、本番のローツェ南壁には11月14日にBC入ります。

クリスマスまでの約一ヶ月、ベストを尽してきます。次のお便りは結果が出た後になりますが、今年こそ「成功」の2文字を書きこみたいと思います。ご声援をよろしくお願いします。

2003.10.22 J A C 東海隊

田辺 治

植村直己 (UEMURA Naomi) 1941.2.12～1984.2.13
兵庫県城崎郡日高町生れ。1960年、明治大学に入学し山岳部に入り登山を始めた。山岳部で登山経験を積み、卒業と同時にアメリカからフランスに渡り、1965年（春）明治大学のゴジュンバ・カン登山隊に現地から参加。ペンバ・テンジンと初登頂に成功したが、登頂したのは三つある頂のⅡ峰（7,646m）であった。再びヨーロッパに戻り、66年（夏）モン・ブラン、マッターホルン、キリマンジャロに登頂した。68年（夏）南米の最高峰アコンカグアに登頂し、アマゾン河を下った。69年 J A C のエヴェレスト偵察隊に2度参加。春は（藤田佳宏隊長ら4名）相沢裕文と6,500mまで。秋は（宮下秀樹隊長ら12名）小西政継と南西壁（右）8,000m地点に到達。70年（春）J A C 隊（松方三郎隊長ら39名）のエヴェレストに参加。5月11日松浦輝夫と南東稜から日本人初登頂に成功した。同年8月、北米のマッキンリーに単独で初登頂。71年（冬）エヴェレスト国際隊に参加する事前トレーニングで小西ら6人で挑んだ冬のグランド・ジョラス北壁は71年1月1日に成功したものの、小西らが凍傷となった。同年（春）、国際隊（N.ディレンファース/J.ロバーツ隊長ら23名）のエヴェレスト隊に伊藤礼造と参加、南西壁（右）の8,000mに到達した。帰国後、北海道稚内から鹿児島まで3,000kmを52日間で歩く。72年9月からグリーンランドのシオラパルクで約1年間イヌイットと生活。73年（冬）シオラパルクから犬ゾリで3,000kmの単独走破に成功。74年11月～76年5月グリーンランドのケケッタからアラスカのコッピューまで北極圏12,000kmを犬ゾリで単独走破に成功。帰国後、エルブルースに登頂し、世界で初め五大陸最高峰登頂者となった。78年3月～4月、北極点に犬ゾリで単独到達。5月～8月、グリーンランドを犬ゾリで縦横断。79年イギリスのバーラー賞（勇氣ある賞）受賞。80年（冬）厳冬期アコンカグア第二登。80年（冬）冬期エヴェレスト登山隊隊長として竹中昇ら16名を率いて登頂を目指したが、竹中が滑落死亡、隊員とシェルパ各1名がサウス・コルに到達し登頂を断念した。

83年南極のヴィンソン・マシーフを目指す、フォークランド紛争のため断念した。84年（冬）マッキンリーの冬期単独初登頂を目指して入山。2月12日、43歳の誕生日に登頂に成功した。しかし、翌日テレビ朝日の取材班との交信を最後に消息を絶った。16日午後3時、パイロットが4,900m地点で手を振る植村を見たと話すが、行方不明のままとなった。同年4月、国民栄誉賞を受賞。著書に「青春を山に賭けて」（S46年）、「極北に駆ける」（1974）、「北極圏1万2千キロ」（1976年）、「北極点グリーンランド単独行」（1978年）、「冒険」（1980年）、「エベレストを越えて」（1982年）、「植村直己 妻への手紙」（2000年）など、捜索・追悼集に「極北に消ゆ」（1985年）、評伝に「マッキンリーに死す」（1986年）、「植村直己 冒険の軌跡」（1978年）、「植村直己の冒険を考える」（1984年）「植村です どうもすみません 愛された世界の探検家」（1986年）、「わが友植村直己」（1986年）などがある。

坂野俊孝 (SAKANO Toshitaka)

1944.7.19～1982.8.31

東京都豊島区生れ。1964年東京医科歯科大学入学と同時に山岳部に入り登山を開始。剣岳、穂高岳などで登山経験を積んだ。1971年（春）GHMJが派遣した隊（芳野満彦隊長ら9名）でダウラギリIV（7,661m）に挑戦、隊長、高橋好輝、松田昭らとミヤグディ・マータ（6,273m）に登頂したのが初めてのヒマラヤ登山であった。73年（春）山学同志会初のヒマラヤ登山隊（嶋村幸男隊長ら6名）のアンナプルナII（7,937m）に参加、6,950mに到達。同年（秋）エヴェレストの南西壁初登攀を目指すRCCII隊（水野祥太郎隊長ら46名）に医師として参加した。76年（春）ジャヌー（現在クンバカルナ7,710m）北壁の初登攀を狙った山学同志会隊（小西政継隊長ら15名）に参加、5月14日、深田良一、片平和志らと第4次アタック隊員として登頂に成功した。同年（夏）ジャヌーの帰途、坂下直枝、竹田幸司と3名でアフガニスタンのノシャック（7,492m）にアルパイン・スタイルで挑戦し、6,200mに到達したが、坂下と

共に重度の高山病にかかり、居合わせたポーランド隊の医師の治療で一命を取り止めた。79年（春）ネパールのタムセルク（6,608m）北壁をアルパイン・スタイルで狙う山学同志会隊（鈴木昇巳隊長ら5名）に参加、6,050mに到達したものの、岡田昇隊員が重度の高山病となり登山は中止された。80年（春）日本で初めて無酸素で高峰登山を実践し、カンチェンジュンガ（8,586m）北壁の初登攀を目指す山学同志会隊（小西政継隊長ら9名）に参加、5月17日大宮求らと無酸素登頂に成功した。82年（夏）K2の北面（中国名・チョゴリ8,611m）から無酸素で北稜の初登攀を目指した日本山岳協会隊（新貝勲隊長ら49名）に参加、無酸素で7,550mまで達したが、体調不良で戦列から離脱、登山活動終了し帰国準備中の8月31日、BCの裏山で死亡しているのが発見された。遺稿・追悼集に「坂野俊孝遺稿追悼集」（1983年）がある。

奥 純一(OKU Junichi) 1947.9.1～1992.4.25

大分県中津市生れ。大分県中学駅伝での区間記録は10年間更新されなかった。1966年夏19歳直前に富士三機鋼管の仲間と大崩山に行き登山を始める。67年東洋工業に入社。68年春広島山岳会入会。大山や穂高岳で岩登りを続け、69年春好日山荘入社。70年岩手国体に広島県選手として出場した。79年（夏）京都カラコルムクラブが派遣したラトックI（7,145m）登山隊（高田直樹隊長ら10名）に参加。難攻不落を誇っていた南壁から7月22日第二次登頂隊として、遠藤甲太、武藤英生、二度目の重廣恒夫と共に登頂に成功した。87年パラグライダー教員学科検定とパイロット学科検定に合格。88年（春）JAC三国合同エヴェレスト交差縦走登山隊（大塚博美隊長ら44名）に参加。北側隊員として北稜の8,200m地点のC6まで無酸素で荷上げた。91年（夏）パキスタン、ルパール・ピークへパラグライダーで挑戦。92年4月25日山口県羅漢山スキー場でパラグライダー滑空中、午後2時15分頃墜落し即死。遺稿・追悼集に「山と空一憧れと実践と」（H4年）がある。

石坂 工(ISHIZAKA Takumi)

1965.6.28～1991.10.8

埼玉県狭山市生れ。1978年狭山市東中学校に入学し、80年ワングル部で雲取山に登り登山を開始。81年県立狭山高校に入学し登山部へ入る。関東の山々を登る。85年東洋大学Ⅱ部WV部へ入部。北アルプスなどで経験を積み、87年登歩渓流会に入会。その秋、登歩渓流会の大平晃嗣、金子秀一とネパール、メラ・ピーク（6,473m）へ登山。10月25日金子と共に登頂。その後、谷川岳、北岳、ハヶ岳などで岩登り、積雪期登山を実践。88年春HAJに入会。89年バーバリアンクラブ設立会員。その春、金子秀一／珠実夫妻とクラブ初の山行としてマッキンリー（6,194m）に挑戦したが悪天で5,200mまで。同年（秋）HAJがチョモランマ北西壁に派遣した登山隊（尾形好雄隊長ら9名）に参加。高所ポーターを使用しない登山で石坂は8,000mのC3に荷上げを敢行。91年（秋）ベルニナ山岳会がマカルー（8,463m）に派遣した登山隊（今村裕隆隊長ら6名）に参加。10月7日長尾（現姓・山野井）妙子と登頂に成功（日本人八千メートル登頂者174番）したが、下山途中8,100m付近でビバークとなり、翌日8,000m付近まで下りたが再びビバークとなり疲労凍死した。遺稿・追悼集に「追悼 石坂工」がある。

石橋 真(ISHIBASHI Makoto) 1952.7.29～1985.5.4

千葉県銚子市生れ。旧姓宇沢であるが1966年石橋栄治と養子縁組。71年銚子高校を卒業し三井造船に入社。市川山岳会を経て76年（春）山学同志会に28期生として入会。77年2月谷川岳一ノ倉沢二ノ沢右壁冬期第3登。78年3月剣岳ハツ峰1峰3稜～ハツ峰～早月尾根。79年（春）山学同志会がカンテガ（6,779m）に派遣した登山隊（湯田一男隊長ら5名）に参加。北壁ルートから4月21日竹内孝一と初登攀に成功。82年同志会のマカルー登山隊（湯田一男隊長ら5名）に参加、9月30日北西稜から湯田、道脇幸博と無酸素登頂に成功。（日本人八千メートル登頂者64番目、日本人無酸素登頂7番目）同年（冬）HAJが冬期初登頂を目指したマナスル（8,163m）登山隊（山田昇隊長ら10名）に参加、アタッカーに指名されるも固辞。85年（春）同志会のクーンブ合宿に参加し、4月20日渋谷英明、有明正之とチョラツェ（6,440m）を南

稜からアルパイン・スタイルで登頂。次いで5月3日豊田敏夫とアマ・ダブルム(6,812m)の登頂を南西稜からアルパイン・スタイルで成功させた。

■ 寸 感 ■

柳田邦男の「空白の天気図」に時の中央気象台長だった岡田武松(寺田寅彦と並び立つ人と紹介されている)の次のような言葉が紹介されている。『観測の記録は、精度を増すために測器による読み取り値を用いるが、実は観測者の観察による諸現象の記述が最も大切なものなのである。然るにどうしたことから、観測とは測器の読み取りだと速断するようになり、観察を軽視するようになってしまった。／気象全体の模様などは決して測器に出て来ない。これらは観測者が絶大の注意を払って観察し、できるだけ詳細に書きつけて置くしか方法はない。／気象学の進歩は観測の成果によって進歩したのではない、力学や熱力学を応用したためである、と従来言われている。表面だけ見ると、なるほどと首肯される。しかし力学や熱力学を応用するには、その基礎となるものがなくては叶わない。これは気象観測の成果から得られたものである。早い話が気象学の進歩は天気図に負うところが多大であるが、天気図は気象観測を資料として製作されるのである。』田村宣紀氏が「山岳文化」創刊号誌上に書き記した『登山界が漫然と「その日暮らしの楽しみ」に甘んじて、登山の目的を追求してこなかった報いだとも思える』との言葉と共に最近私の胸に染みた言葉である。(山森)

事務局日誌 (11月)

- 3日(月) HAJ関西集会資料作成
- 6日(木) ヒマラヤ385号発送
- 8日(土) HAJ関西集会(於:大阪セルロイド会館(46名))
- 10日(月) パスー峰隊石川隊員へ山岳共済カード送付
- 11日(火) パスー峰 高橋隊員の共済請求について三井住友から照会を日・パトラベルへ依頼
- 12日(水) 野沢井歩前専務理事合同追悼会案内状作成

しかし、その日は5,950m地点でビバークとなり、4日下降中に5,900mで滑落し死亡した。遺稿・追悼集に「さわやかな風と共に」(S61年)がある。

中村正勝評議員(長野)、ラサから華甲望年会の件で電話入る

- 14日(金) ICI石井スポーツ、カモシカスポーツへ「新日本ヒマラヤ会議」パンフレット送付
- 17日(月) 国澤鎮雄評議員(高知)来会、懇談
- 25日(火) 東京集会(19名)
- 29日(土) 第1回「山岳文化学会大会」於:東京、慈恵医科大学(酒井、山森)
- 30日(日) 好山会創立50周年記念祝賀会、於:サンパール荒川(山森)

■野沢井支援〔5万円〕坂本重顕

■財政支援〔10万円〕石川龍彦、
〔81,600円〕樋上嘉秀、
〔2万円〕戸部秀男、〔1万円〕脇田康治

■事務局年末年始閉鎖

12月27日～1月5日。仕事始めは1月6日です。

東京集会のお知らせ

- 日時 12月25日(木)午後7時～
- 内容 忘年会
- 場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

ヒマラヤ No.386 (1月号)

平成15年12月10日印刷 16年1月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆
キャラバンデスク
(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本社

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区千代田2-1-4 日比谷中ビル6F
TEL: (03) 3595-4830 (代)
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook>

最新 クライミング技術	山小屋の主人の 炉端話	マレーシア・ボルネオ・スマタラ 半島探検記	すぐ役立つ 山の氣象と救急法	すぐ役立つ 記念日の山に登ろう	すぐ役立つ 山のメモ帖	中高年の雪山入門	すぐ役立つ 新・山の雑学ノート・第1集	女性ガイドの しなやか登山術	新・山靴の音	中高年登山 なんでも百科	登山の 運動生理学百科	山書散策
ジム・ワグネルのフリークライミングからマルサ・ビッチ、アルパイン・ヒップ・フールまで、すべてのロッククライマーが必読の書。この技術と経験を伝えるマニュアルとしてではなく、その意味と、登山家としての心構えを詳しく解説。実践的なクライミングのヒント、心構えなども細かくアドバイス。	著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る人話の取つて置きの話。	北アラスカを代表とする77のルートをわかりやすく解説したルーツ案内書。	山の気象と救急法を関連する天候判断と事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。	人それぞれの記念日の日付と標高が致する山はどれか。	「岳人」連載の「山の雑学ノート」から95編の話題を取り上げた、山のフチクを深め、安全登山の指針となる冊。	低山から夢のヒマラヤまで…。トラブルを未然に防ぎ、山銀の大冒険を満喫しながら、雪山歩きを楽しむ。	山での話題が盛りだくさんの数だけではない。山岳の雑学が登山をより楽しく安全にしてくれる。	常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける女性登山ガイドのユニークな登山講座。	遠慮をわかれた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。	「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむよう、中高年登山の虎の巻。	「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」と、ヒマラヤなど高所登山実感を踏まえて、わかりやすくまとめた。	今まで数多く発行された山書。何を読んだらよいかわからないの指針として「岳人」連載時から好評。
菊地敏之 著	工藤隆雄 著	廣川健太郎 著	飯田睦治郎 著	石井光造 著	岳人編集部編	福島正明 著	岳人編集部編	樋口英子 著	芳野満彦 著	福島正明 著	山本正嘉 著	河村正之 著
1600円	1500円	2500円	1359円	1300円	1400円	1600円	1400円	1500円	1262円	1500円	2000円	1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

●登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
●新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
●神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1 (タキビル2F) ☎03-3295-0632
●神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
●八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
●大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
●高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
●川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
●甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
●長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

●新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
●秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
●盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
●北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
●伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
●平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
●外商部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004